

《題目》某医科大学の先生の勉強会

ブリストル時代のバイオケミカル事業部は、日本で最初の本格的な民間の臨床検査受託センターでした。現在のように、何処の病院や検査センターで測定しても、多少の差はあっても、ほぼ同じ値が得られます。しかし、私がブリストルに入社した頃は、臨床検査の創成期であり、今では考えられないような問題が山積していました。理学部化学科を卒業した私には『これで分析と言えるのか？』や『こんな酷いデータで料金を貰って良いのだろうか？』と思ったことを覚えています。

仕事に就いて数年後、某大学の先生と某医科大学病院の技師長が主催し、神奈川県内の病院の技師長クラスの先生達が集まって、新規検査項目候補の記載された論文紹介や検査法の反応原理の掘り下げ、問題のある検査項目についての討議、精度の悪い分析法の原因と改善法などを取り上げ、学術知識を深めるとともに、臨床検査の発展に寄与すべく、私的な勉強会を行っていることを知り、私も参加させてもらいました。この勉強会は、あくまでも私的な勉強会であり、午後 7 時位に始まり、10～11 時になることも稀ではありませんでした。勿論、会社から交通費等も出ることはありませんでした。しかし、理学部化学科出身の私は、殆ど先生たちの話を聞いているだけで、有用な論文の紹介や問題点の提案などは全くできませんでした。しかし、先生達の話の聞いているだけで、大変勉強になりました。社内だけに留まらず、広く交流を広げることの重要性を痛感しました。

最後に、主催者の 1 人である某医科大学病院の技師長についての思い出を書かせて頂きます。ある時、内科の教授（日本内科学会の雑誌で掲載論文の検閲を行う極めて著名な医者）が、この技師長を訪れ、患者の病状と考えられるいくつかの病名を説明し、その医者が考えている検査項目を示し、『これ以外に、行った方が良い検査があれば教えてほしい』と相談しに来たのです。その技師長先生は、更に患者の病状を聞いた上で、数項目追加することを薦め、内科の教授が嬉しそうに、納得していたのを覚えています。このようなことは、1 回や 2 回ではありません。現在、医療機関の中で、何%の検査技師が、このような、臨床医に認められる存在でいるのでしょうか？この先生は医師ではなく検査技師でしたが、このようなことが出来てこそ医療チームの中で認められる存在に、検査技師がなれるのだと思います。